

「大学に残れよ。ダメだったら、おまえの骨は俺が拾ってやるから」。富山和彦さん（現・経営共創基盤グループ会長）からこう言われなければ、私は研究者になっただけじゃなかったはずだ。

東京大学修士2年で地質学を学んでいたとき、私は進路に迷っていた。研究は好きだが、大学の非合理的な人間関係が嫌いだ。相談したのが富山さんだ。

出会いはその5年半前。山スキーをやるうと入った基礎スキー同好会の会長が法学部3年の富山さんだった。人を引きつける強烈な個性、論理的な物言いも理系の私に腹落ちした。「ついていくならこの人」と直感し、卒業後は自分も経営コンサルタントになろうとすら考えた。

いま思えば、おまえはコンサルには不向きだと、暗に諭されただけかもしれない。しかし「教授くらいにはなれる」とおだてられて私は学者になる決心をし、その後、海底資源の研究に没頭する。

2011年、私はハイテク製品に不可欠なレアアース（希土類）泥を太平洋の海底で見つけ、新聞各紙が1面で報じると富山さんに報告に行った。「早く採掘技術を開発しないと中国に先を越されてしまう」と焦る私に、富山さんはいつも冷静な経営目線で助言をくれる。「資源は逃げやしないよ」（かとう・やすひろ

東京大学工学部長・工学系研究科長）

（日本経済新聞、2023年5月5日掲載）